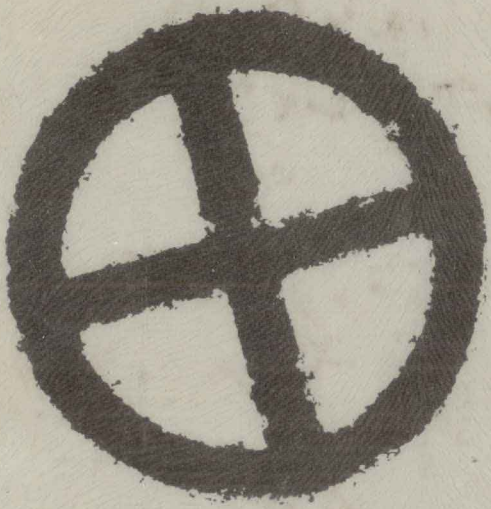

西郷隆盛　第五巻

月魄の巻

書名	西郷隆盛　月魄の巻
著者	林　房雄
定価	三八〇円
発行所	徳間書店　東京都港区新橋四の一〇
発行者	徳間康快
発行日	昭和三十九年九月五日　初刷 昭和四十年九月十五日　五刷
印刷所	図書印刷株式会社
製本所	大口製本印刷株式会社
製函所	文京紙器株式会社

乱丁，落丁ありましたらおとりかえいたします　　林　房雄 ©

林房雄

西郷隆盛

第五巻＝月魄の巻

西

鄉

隆

盛

／

目

次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

月魄の巻＊＊＊＊目次

第一章　芋の弟子＊＊＊＊9
第二章　南の秋＊＊＊＊41
第三章　道中記＊＊＊＊59
第四章　風と雲＊＊＊＊82
第五章　あの道この道＊＊＊＊109
第六章　羅紗羽織＊＊＊＊136
第七章　採薪亭＊＊＊＊158

第八章　山紫水明＊＊＊＊178
第九章　雨＊＊＊＊211
年表＊＊＊＊236

挿絵・山崎百々雄／装幀・上口睦人

月魄（つきしろ）の巻

第一章　芋の弟子

「兄さん、またおかしな弟子が一人増えたぜ」

吉次郎が笑いながら吉之助の部屋に入って来た。右手にさげた藁苞を振って見せて、「芋だよ。手土産のつもりだろうが、芋を持って来た奴ははじめてだ」

「名前は何という……」

「吉野村の桐野半次郎利秋だと名乗っている。まだ子供だが、ばかに長い刀を差して、威張りかえっている。あうかい？」

「聞いたことのない名前だが……わざわざ訪ねて来てくれたのだ、あおう」

案内された桐野半次郎はまだ二十歳前の若者で、洗いざらしの絣の単衣に破れた袴をつけ、塗りのはげた朱鞘の太刀を右手につかみ、不機嫌そうに廊下に突立ったまま、部屋に入ろうとしなかった。

「桐野君といわれたな。私が西郷吉之助。……まあ、おはいりなさい」

吉之助にいわれて、ペタリと廊下に膝を突き、うやうやしく頭を下げたが、

「西郷先生、いま私を案内してくれたのは誰ですか？」

「あれは弟、吉次郎と申す」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「先生の弟御は私を馬鹿にしているようです。私が唐芋を持って来たのがおかしいらしい。……なぜ、おかしいのでしょうか」

「……」

「私は吉野村で百姓をしております。昼は畑を耕し、夜は紙をすき、毎日、飯のかわりに唐芋を食っています。……私がもし米を食っていて、芋をさげて来たのなら、笑われても仕方がないが、毎日食っている芋を持って来たのが、どうしておかしいのです？　芋は私の米です」

「吉次郎が笑いましたか。それは悪かった」

吉之助は真顔で頭を下げた。「私から謝ります」

「はあ、こりゃあどうも……」

桐野もあわてて頭を下げ、「なんだか理窟のようなことを申しまして……私が悪うございました。先生、お許し下さい」

武骨な頬を耳の根まで赤くしている。邪気のない人柄らしい。

「まあまあ、こっちにおはいりなさい。御用事をうけたまわりましょう」

「用事ではございません」

膝で歩いて部屋の中に入って来て、「ただ、先生の御教示を受けたいのであります。私は……私は……吉野村の平士族に生れまして、学問もなく、智恵もなく、まして天下の有様などまったくわからないのでありますが、近ごろうけたまわりますれば、異国船の到来により、江戸や京都の風雲急を告げ、先生は早くよりこの形勢を察せられて、国事に奔走されているようで……私……田舎者でありま

すが、天下の志だけは持っているつもりであります。先生の御教導によって、大いに……そ、その識見を養い、一朝事あるとき、何か役に立つ働きを致したいと思いまして、そ、その……」

舌が乾いたのであろう、先がつづかぬ。

吉之助は笑わず、

「それはなかなか立派な心掛けだ」

「先生、相すみませんが、ちょっと、その……」

床の間を指さして、「その木剣を貸していただきたいと思います」

「はあ、あれですか。お使いなさい」

何をするつもりかと見ていると、桐野少年はその木刀をつかんで、いきなり庭にとび出して行った。

*

半次郎は庭の立木をあれこれと物色している様子であったが、生垣の上にさし出た松の枝を見つけてその前に立ちどまり、吉之助の方へ一礼して、木剣を青眼にかまえた。

「えいッ！」

鋭い気合であった。松の枝はバサリと庭に落ちたが、幹は小ゆるぎもしなかった。

半次郎は得意げに胸をはって座敷にかえり、吉之助の前に両手をついて、

「古示現流であります」

「……」

「私は学問の方ははなはだ不得手で、身についた芸能は一つもありませんが、ただ剣法だけは、伊集院鴨居先生につき、多年工夫をこらし、いくらか自得したつもりであります。ただ今御覧に入れましたとおり、松や桜の枝なら、子供の腕くらいの太さまでは木刀で斬り落せます。……何かお役に立つことがあったら、いつでも使っていただきたいと思います」

「あんたは幾歳になった？」

「はい、十九歳であります」

「これから学問に志を立ててもおそくはない」

「まだ間に合うでしょうか？」

「間に合います。学問というものは、決して経書を暗記したり、詩をひねったりすることではない。論語読みの論語知らずという諺もある。文字よりも精神だ。……殿様もかねがね申されているとおり、学問の本意は、義理を明らかにし、心術を正し、おのれを修め、人を治むる器量を養うことだ。君に対して忠、親に対して孝、人に対して仁、これだけのことが実行できれば、学問の道に達したといえる。文字の末節にこだわる必要はない」

「はあ」

「真の学者というものは、楠正成のような人のことだと私は思っている」

「はあ」

「学問も深い人であったそうだが、楠正成公の偉さは、いっさいを捨てて王事につくしたということです。道のために喜んで死んだことです」

「先生、近いうちに江戸か京都に戦争は起りませんか？」
「それは……起らないともかぎらぬ」
「戦争さえ起れば、私は喜んで死んで見せます。国に害をなす奴どもを、木の枝のようにたたっ斬ればいいのでしょう。それなら私にもできます」
「はっはっは、面白い人だ」
「先生は、また江戸か京都にお上りになるのではありませんか？」
「さあ、それはまだわからぬ。とび出したいのは山々だが、殿様の命令が出なければ、動くわけにはゆかぬ。当分、国許にいて、若い諸君と一緒に勉強するつもりです」
「じゃあ、私もときどきやって来ていいですか」
「おいでなさい。朝早くか、日暮の後なら、たいてい家にいる。一の日と五の日の夜には、方々から稚児や二才たちが集まって来ます」
「稚児も来ますか。私の従弟に別府晋介という奴がいます。まだ十一歳の子供ですが、なかなか見どころのあるやつで、勉強させてやりたいと思っていますが、いい先生が見つかりません。連れて来てもかまいませんか」
「ああ、連れておいでなさい」

*

吉之助の家に集まって来る郷党の青年たちの数は、意外なほど多かった。

同じ方限の少年たちに文字を教え、素読を授けることは、年長者の義務であるから、江戸に出ぬ前にも吉之助は熱心に少年たちを教えていた。だが、こんどは、下加治屋町だけでなく、他の郷中の青少年たちまで集まって来る。芋の苞をさげて吉野村からやって来た桐野半次郎利秋もその一人だが、例えば村田新八は高見馬場から、篠原冬一郎国幹は平町から、有村俊斎の弟、雄助と次左衛門は尻枝村からはるばるとやって来た。他の郷中の者と公然と交際することは藩の禁制であるが、青年たちは平気であった。吉之助もそんなことは気にかけず、集まるものはすべて喜んで迎えた。

吉之助が語る江戸や京都の形勢は予想以上に青年たちの血を湧き立たせたようであった。特に水戸派の学説と行動が喜ばれた。藤田東湖詩集はこぞって筆写された。桜任蔵の話をもっと聞きたいというものもあった。

「いったい薩摩はいつ勤皇の義旗をひるがえすのですか。ぐずぐずしていては、水戸におくれをとることになるではありませんか」

そんな先廻りをした質問をして、吉之助を驚かせる少年もあった。

中でも村田新八が激越であった。齢はまだ二十一歳だが、身の丈は六尺に近く、議論だけでなく、相撲をとっても、なかなか人に負けなかった。吉之助が江戸仕込みの手で投げ倒し、ねじ伏せても、決してまいったといわぬ。高山彦九郎の崇拝者で、どうしても一度久留米に行って、彦九郎の墓に詣でたいと口癖のようにいった。

「高山彦九郎のことなら、水戸の桜任蔵という人がくわしい。彦九郎の手紙や記録も熱心に集めていた」

「そうですか、まさにわが党の先輩ですね。一度あいたいな。どこに手紙を書いたらいいでしょう」
「飄々乎として、どこにいるのかわからぬ人物だ。今ごろは京都かと思うが……」
「高山先生の弟子なら、それが当然です。この時勢にじっとしておれるような奴はみんな偽物です」
「高山彦九郎のどこがそんなに気に入ったのか？　伊地知正治も久留米の墓前に石燈籠を寄進して来たといっていたが……」
「伊地知さんだけではありません。川井田市郎左衛門、志々目献吉さんも火鉢を寄進したそうです。僕も何か寄進したいと思って、今から心掛けています。……まったく心外だなあ、今さら、高山彦九郎のどこが気に入ったのかなんて、本気ですか。先生の口からそんな言葉を聞こうとは思いませんでした」
「どこが気に入ったのか、聞かせてもらおう」
「本気なら話します」
「もちろん、本気だ」
村田新八は坐りなおし、目をかがやかせて語りはじめた。
「高山先生は寛政四年……今から六十年ほど前に薩摩に来られて、鹿児島には百日あまりも滞在されております。

薩摩人
いかにやいかに苅萱の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com